

今日はクリスマス。私も暁星学園（東京・千代田）で、小中高校と、カトリック教育を受けましたから、聖歌をソラで歌えます。なお、幼稚園は築地本願寺の付属でした。6歳にして、宗教に無頓着な日本ならではの「改宗」を経験したことになります。

さて、現代の医療の源流はキリスト教にあると言えます。病院の形も中世ヨーロッパの修道院に起源を持ちます。修道女たちが、貧者や病人を修道院のなかにかくまうて、手当ケアを行っていたのです。医療の根底には、キリスト教の「愛の精神」が息づいているのです。

このことはフランス、ブルゴーニュのオスピス・ドゥ・

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

患者支える「治す」と「癒やす」

われていますから、長い間、がんを治すことなど不可能だったわけです。

つい最近まで、がん患者に對してできることといえば、癒やしや慰めしかありませんでした。近代的な医療技術は、ケアという基盤に付け足される形で提供されたものであって、ケアこそが、医療の原点なのです。

しかし、先端的ながん治療を売り物にする病院でも、医師だけでは医療は成立しません。病院に医師と看護師の両方がいることから分かるように、つねに、「治す」と「癒やす」の両方がバランスよく提供されなければよい医療とは言えないのです。

私の膀胱（ぼうこう）がんの入院経験でも痛感したことですが、看護師と医師が上下関係ではなく、チームになって患者を支える体制が大切です。治療とケアの両方がつねに必要で、病状によって、ウエイトが変わってくるだけなのです。これは、がん対策基本法の最も重要な考え方だと言えます。

（東京大学病院准教授）

ボーヌ（神の宿とも呼ばれる中世の施療院）を訪れたときに実感しました。現在のホスピスの原型がそこにありました。

今でこそ、がん全体の3分

の2、早期であれば9割以上が治りますが、華岡青洲が全身麻酔を用いたがん手術を世界ではじめて実施したのは1804年のことです。最初の

放射線治療も1896年に行

病気の「治癒」とは「治す」と「癒やす」から成り立っています。しかし、医療技術の進歩は「治す」と「癒やす」の関係を「治す√癒やす」と

変えてしまいました。